

ふるさと風

第68号 (2012年1月)

風に吹かれて (47)

白井啓治

『月光に磨かれ里山の風の静に凍てついて』

暮れの25日のこと。ギター文化館の忘年会に招かれて出かけ、その帰りに向かいの里山を眺めていた時に口をついた呟きの言葉である。

鋭いプラチナの棘のような星の瞬きの中に輝く月の明かりも里山を削り、磨くかのような冷たさを持っていた。しかし、寒いという感覚はなく良いな、綺麗だな、の声がついてきた。本当に魅せられる里山の月夜の風景であった。

そして大晦日の夜、庭から月を眺めてついでに呟きは、

『初春に矢の射放った上弦の月は静かに』
であった。

世間の実相がどうであるかは別にして、古代、いや太古から月の満ち欠けは同じ周期でとどまることなく続き、眺める者の情態を映しておしえてくれる。

年の明けた元日には、

『顔を見せぬ初陽に自力たれを願ふ』

正月二日には、

『黒雲を眺めて しかし平安なり』

を庭の椅子にお犬様を従えて座り呟いた。

今年、辰年は昇り竜の年ともいわれ、運氣の高まる年だと言われている。干支で運氣や景気が左右されるはずもないのだが、鰯の頭も信心からのごとく、今年はいい年なのだと信じ、自力たれば良い一年を創造することが出来るだろうと思う。

「赤信号みんなで渡れば怖くない」とは、北野武ことビートたけしが漫才の時に演じてみせ、「コマネチ」と合わせて一世を風靡したのであるが、彼の二十数年…いやもつと前になるだろうか、そのブラックユーモアが昨年の東日本大震災によって引き起こされた原発事故となって見事と言っては不謹慎ではあるが、証明された。目先の利におぼれ皆で渡ればと渡ってしまった拳句の結論が示された。みんなで責任を負わないで済むようにと考えたのであるが、渡った途端に負わないはずの責任をみんなで背負わされてしまった。大変な悲劇ではあるが、この悲劇から確りと学び、明日に向けてはそれぞれが自力で判断し道を歩めば、今年はいい年になるのだろうと思う。

年頭にあたって、こんなことを思った。今年は例年同様「馬鹿野郎」も声高に叫ぶが、「素晴らし。それは素晴らしい」と自分自身のことを含め周りの良いところを褒め、賛辞しよう、と。

他人の欠点を、短所を利口ぶって指摘しても、そこには何の創造も生まれない。創造がないから

夢もない。夢がないから物語もない。短所や欠点を指摘しても決して伸びることはない。所謂長所をもっと気持ち良く伸ばせば、自力が高まってくるだろう。そして文化力も高まってくるだろう。だから、まずは自分を褒めそして他人を褒めよう。そうすれば今年はいきつと昇り竜となるに違いない。

謹賀新年 (本年もよろしくお願いたします)

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談・勉強会を行っております。

○会費は月額 2,000 円。(会報印刷等の諸経費)入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063

打田 昇三 0299-22-4400

兼平ちえこ 0299-26-7178

伊東 弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

2012年正月。

最悪だった複合災害の年も明け、新たな年を迎えたが、さっぱり晴れやかな気分にはなれない。東北3県に比べたら、やや軽症であった茨城でさえ、こうなのだから、地震・津波・原発事故を、もろに受けた方々には、さぞかし心重い正月であつたらうと思いやられる。炬燵を囲む輪の中に居るべき人がいない…こんな悲しい正月など来ない方がよい…と思われたかもしれない。

しかし、いつまでも悲しみに陥ってばかりもいられない。年明けとともに、復旧・復興に正面から立ち向かう覚悟で、自ら前途を切り開いてほしい。何かに向かつて、がむしゃらに動いているときは、重い痛みもいくらか和らぐもの。ご健闘を祈ります。

* * * * *

さて、私事で恐縮だが、2007年12月「ふるさと『風』」の会に加入させてもらい、丸4年が過ぎた。勧められるままに筆をとり、毎月、独善と偏見を顧みず、拙文を投稿し続け、ついに今月号で私個人としては、第50号ということになった。長い駄文なのに、長年読み続けてくださった方々には、心から御礼申し上げます。

よくも途中で一度も途切れることなく、50か月も連続投稿を果たしたものと、我ながら感心。専門分野の論文書きは、現役時代、かなりやっていたが、エッセイなど、文筆活動は皆無。日頃の日記さえ殆ど書いたことがない。しかし、入会と同時に、編集長はじめ、諸先輩方の強力な進取の精神に導かれ、今日まで来られたものと、心から感謝いた

しております。

50号まで来たのだから、次の目標は何とかして100号まで頑張りたいもの。あと4年強、石にかじりついていても、やり遂げたいと思っています。

さて、もし私がこの会に加入せず、定年退職後の日々を漫然と過ごしていたなら、今どうなっていたかと思うと、恐ろしくなる。退職後、最初の内は結構多忙ではあったが、後半は週3日の、嘱託の仕事は持つてはいたものの、「碁」を打って、ゲーディングで花咲爺さんの平凡な毎日であったと思う。孫の送り迎えと犬の散歩。居眠り脳味噌に、拍車をかける毎日であったと思う。

ところがこの会に加入し、編集長曰く、『自分の意思をはっきり表現しろ！既存の「型」を破って新しい世界を切り開け！事なかれ主義の着飾る物言いはダメ。自分で責任持てることなら、何を書いてもよろしい』。そう言われると単細胞の私は、すぐその気になって、よくぞこれまで、言いたい放題。独善と偏見はお構いなし。どうせ、先の長い身ではなし。この世に生きた証しとして、言いたいことは歯に衣着せず、はつきり明言しよう…。そう心に決めて、全ての生物の子孫が、住みよい地球環境を残すのが、今この世に生きる者の責務である…と、大声で叫び続けてきた。

長年の役人生活。言いたい事も言えず、姑息に無難な道を選ぶ。私の属した県職員は、国と市町村の間に入って、調整役というか中間職。個性を生かした全くの新規事業など、滅多なことではきはしない。今思えば「陳腐」という字は、脳眠組織の代名詞のようなもの。ちよっと創意工夫で新しい何かをやろうとすれば、既存の枠で、予算がない・人がいない・周囲から理解を得にくい…

など、出る釘はすぐ打たれる。今回、災害復興の対応の鈍さを見れば、あちらを立てれば、こちらが立たず…役人の苦悩も分かるけど…。

そうこうして長年の萎縮した人生は、もう、おさらばだ。ついに木端役人の雌伏生活に決別して、これまでに対する反動というべきか。思いきり羽を広げ、ありのままの自分を表現する。自分自身の信じてやまない「プリンシプル(原理)」一本。筋が通っていれば、枝葉はどうでもよい。その気になって、書きまくってきた。

私自身、争いは嫌いで、結構温厚な性格と思っていたが、筆をとると意外や意外。かなり激しい攻撃性のある乱暴者のようだ。そこで私の文筆上の攻撃目標は、他の動物に比べ、短期間に膨らまし過ぎた人類の脳。この化け物が、ろくなことをしない。無数に創り続けた悪魔のオモチャを見ればすぐ分かる。この世の中は、新幹線では物足りずリニアモーターカーときた。戦闘機もマッハ2だ3だと鎗を削る。大陸間弾道弾やら、今や、サイバー攻撃など戦々恐々。経済と絡み、戦略は歯止めが利かない。阿修羅の独壇場だ。

人類は種として長期間生存したいのなら、大脳の発達は、もつとスローペースでなければならぬ。文明の進化も、石器時代開幕当初は、石斧など百万年も殆ど姿を変えていない超スローペースであった。それが、今から40万年ぐらい前、「火」を自在に人間の手でコントロールできるようになってから、急速に大脳を膨らまし始めた。即ち、栄養獲得手段が急速に進化した。それから以後は、大脳を膨らませた原人・旧人などの種が次々枝分かれし、ネアンデルタール旧人の後、ついに現生の新人「ホモ・サピエンス」が誕生し、進化の歴

史の歯車を急回転させた。オランウータン・ゴリラのような温厚な動物なら、自然の中に穏やかに溶け込み、バランス上、良好であったが、チンパンジーや人類のように獰猛な、気性の激しい動物へと進化したのは、誠に残念である。

さて、人類のそれから以降のことは、ご存じのとおり。長期の狩猟・採集の生活から、1万年ぐらい前、メソポタミアあたりに定住をはじめ、有用な植物を栽培し、自然界の扱いやすい動物を飼いに馴らし始めた。数日間も食糧が口に入らない、苦痛の日々から解放されると、言語や道具も改良され、芸術さえも花開く。しかしそのうち、欲の深い者が現れ、富を一人占めしようとする。持てる者と、持てない者との争いが始まる。狩猟採集時代、分け合って仲良く暮らしていたものが、豊かになるとかえって、略奪やら侵略へとエスカレートする。それが人類の辿ってきた道筋だ。

短期間にこのように、生活様式が変わると、社会に多くの歪みが生じる。よく言えば文明開化かもしれないが、真実のところはバランスの崩れた急変とも言える。急ぎ過ぎると終局がすぐやってくる。社会構造や肉体構造が充実する前に、破綻が来るような気がする。人類の種としての寿命は、残り1万年足らずという学者もいる。

種の長期存続手段として私の理想とするのは、南米の「ナマケモノ」。日がな一日、のんびり木にぶら下がり、鼻ちようちんで居眠り。このようなペースなら、人類の未来にも光が見える。寸刻を惜しんで励み過ぎるのは、必ずどこかに歪みを生じる。スローライフこそ人類生存の必須の手段だ。

とにかく、人類は調子込んで大脳を膨らまし、我欲を突っ張り、なりふり構わず、侵略・強奪を

繰り返し、地球環境を破壊していく。子孫の安全な棲みかを荒らしていく。それが許せない。無秩序に人口を増やし、資源を枯渇させ、ケンカばかりしている。それが気に入くないから、老犬ながら、吠えまくる。

生物はすべて、DNAそのものが利己的にふるまう。いくら高尚なことを口にしようが、DNAの命令には逆らえず、他から栄養を奪って、己の成長・繁殖を第一義とする。性善説など、夢遊病者のタワゴトのようなもの。これが人間だ。歴史がそれをはつきり証明している。戦争のない時代など無かった。万物の霊長などと自惚れるのも、ほどほどにしてほしい。己をコントロールできないのだから、野獣以下と言われても仕方あるまい。

芸術家は人間の美しさを讃えるが、私のようなひねくれ者は、どうすれば美学に酔えるか？ 今更ながら、心の修行を積んだとて、唯物論的に人間を観る習慣は、変えようにも変えようがない。

人類も自然の中の一つの動物にすぎない。他の生物を根こそぎ絶滅させるような犯罪は、決して許されるものではない。もつと謙虚に全てが共栄していくことこそ、絶対に守らなければならぬ第一原則……と固く信ずる。

* * * * *

さて初回の投稿は「狼へのレクイエム（第19号）。農耕民族である日本人が、明治維新とともに、西洋の文化はなんでも優れているものとし、イソップ物語（BC3世紀）を直訳し、狼は悪党だとするコンセプトを、そのまま日本に導入。

維新の直前までは、田畑を荒らす草食獣（鹿・猪・野兔・鼠など）を退治してくれる狼こそ最も大切な獣として、秩父の三峰神社ほか、全国に狼

を守り本尊とする神社は多数あった。狼を神として崇め奉ったのだ。オオカミに当てる漢字は、獣偏に良いと書き、農耕民族の尊敬を集めていた。それが、ヨーロッパは、牧畜を主とするため、狼の棲みかを人間が奪った事は柵に上げ、やむなく、たまに家畜を襲わざるを得なかった狼を、害獣・悪の権化みたいに罵る。それを何の抵抗もなく、それまでの日本の置かれた立場を忘れ、狼を悪者扱いする日本人の浅ましき。

愚かな明治政府は、賞金を懸けて北海道の「エゾオオカミ」を1900年までに駆逐し、内地では、「ニホンオオカミ」を1905年までに絶滅させた。愚行の標本みたいなもの。

今、知床では「エゾシカ」が10万頭を超え、木を枯らし、農作物を荒らし、交通事故が多発し、食物連鎖の自然の摂理を、人間が破壊したことに苦悩しているという。初回号では、私自身獣医師の立場からも、狼の霊に対し、人類のなした愚行を詫び、陳謝した。

さてそれからの投稿は、私が少年時代から抱いている「自分とは何か？」に重点を置き、「人間の本性」、人類の歩んできた「遙かなる旅路」など、自然科学の進歩を頼りに、自然界で人間はどのような位置を占めているのか。ならば今後、どのような位置を占めなければならないか……など、己の非力を顧みず、独善と偏見を縦横に駆使し、言いたい放題。今日までに解き明かされたサイエンスを元に、自分が信ずるところを貫き通してきた。

そして、星空を仰ぎながら、銀河系・太陽系・惑星等がいつどのようにして作られたのか……どうしてこの星に生命が誕生したのか？ などと思いを馳せる。そして更に、自分の体を構成する元素

は、いつどこで作られ、どのように新陳代謝を繰り返しているのか？ 他の星ではどうなのか？ 疑問は尽きない。DNAの分子構造は分かった。しかし、それが40億年も前、偶然にも海の底で、細胞膜のようなもので囲まれ、最初の生物らしきものが誕生した。それが周りから栄養となるものを取り込み、新陳代謝を繰り返し、体積を増し、分裂を繰り返す。連綿とそれを繰り返す、ついに現在の全ての生物に繋がっている。

最初の生命らしき物体の中心に、生命の基本であるDNAを大切に囲う「核膜」ができ、細胞質を囲う「細胞膜」ができて、一人前の1個の生命を持った最初の「細胞」が出来上がる。それから以後は、単細胞生物時代を30億年も重ねて、今から10億年前、初めて「多細胞生物」が現れる。更に「雄」なるものが現れ、自由に動き回る「動物」なるものが現れる。

地球の歴史を振り返ると、幾度も酸欠や、酸・アルカリの環境変異、地球の公転軌道が他の惑星により攪乱され、氷河期や温暖期を繰り返す、海底火山爆発や小惑星衝突など、全生物の9割も絶滅する危機を何度も乗り越え、現生生物は生き残ってきた。

そしてついに、2億年前、恐竜の天下の時代に恒温の哺乳類の元祖が地上に現れ、食虫目の仲間から霊長類へと進化し、ついに我ら人類がこの世に誕生する。

人類誕生の地はアフリカ東部のサヴァンナである。樹上生活（親指と他の指が向かい合っていることがその証拠）をしていた類人猿の仲間から、地面に下りて700万年前、直立2足歩行を始めた大型類人猿が、我々の祖先である。大きな牙や

鉤爪があるわけでもないのに、視力・聴覚・嗅覚・味覚など、それほど優れてもいないのに、よくぞ猛獣がウヨウヨしているアフリカのサヴァンナで生き延びられたものだ。ジュシーな果物は、猿共に先にやられる。おいしそうな植物は、無数の草食獣に食い荒らされ、地中の根茎類は、鼻の利くイノシシなどに先にやられる。

人類の祖先は、どれほど飢餓と戦ったことやら。食べる時に食い貯めをして脂肪として蓄えておく：それが本来の人間の習性であり、基本生理だ。今時、何がダイエットだ？ それは祖先伝来の、生存原理を否定する不屈きな考えである。

さて、人類がサヴァンナで生き延びられた原動力は、体毛を失い、汗腺のエクリン腺（水分に富む）の発達により、体表から水分を蒸発させ、体温調節がうまくいき、獲物を追いかける長距離走でも、獲物より先にダウンすることがなかった。

ヌーやシマウマなど、比較的大きな獲物を手中にすることができた。栄養は特段に改善された。即ち、「体毛喪失」こそ、人類進化の原動力と言われる。動物の体毛の汗腺には、アポクリン腺が発達しており、脂質に富むため、体温放出にはあまり役立たない。人体で体毛喪失革命に取り残されたのが「腋毛」「陰毛」で、これらは動物と同じ、アポクリン腺が主体のため、体臭の発生源であり、仲間同士の個体認識や、繁殖情報の通信手段であったと思われる。

こうしてサヴァンナで生き延びた人類の祖先は、栄養豊かになると、人口も増し、新天地へと拡散を図るようになった。強い好奇心は、今から7万年前、アフリカの一部の種族は、サヴァンナを捨て、現エチオピアあたりから紅海を渡り、アラビ

ア半島へと150人ほどの集団で、脱出を試みた。現在、DNA解析により、これらのことが明確に推測されている。

アラビア半島から、更に東方へ進出したのが、我々モンゴロイド。北方へ進出したのがコーカソイド（白人）。そして、再びアフリカへ逆戻りしたのがネグロイド。現在70億人の世界人口の元祖は、7万年前、アフリカを飛び出したわずか150人のご先祖様が全てである。それゆえ、現在の全世界の人類は、皆親戚のようなもの。それが肌の色が違うとか、イデオロギーが違うとかで、いがみ合っているなど、本当に情けなくなる。言い争いぐらいなら、ともかくとして、皆殺しを図る原爆投下など、どう考えても、そんなことを決断するに至った大脳進化を、私は理解できない。次から次と悪魔のオモチャを発明し、運用するなど、膨らんだ人類の大脳を、私は「毒饅頭」と名付け、文筆上の攻撃目標とする所以はそこにある。

そこで我々は、30年後、予想される地球温暖化・資源枯渇・食糧事情などを逆算し、ならば今、何をなさなければならぬか？ 何をなしてはならないかをはっきり念頭に置き、元且を迎えるにあたり、1年の計を立てたいものである。

あと4年強。元気で投稿を続けられるかどうか。何が何でも、やりぬく覚悟だが、単細胞の私は、『読みましたよ！』の一言が、励みとなる。少々疲れ気味でもあり、ネタも切れそうだが、科学の進歩や世界情勢に敏感に反応しながら、リアルタイムで書き続けようと思っている。「ふるさと風」をよろしく願っています。

年の初めに

兼平ちえこ

明けまして二〇一二年

龍(隆)盛に乗って

飛躍の時

ちえこ

皆様にはお元気に新しい年をお迎えの事と存じます。

昨年は「千年に一度」と評された大地震、巨大津波の襲来、史上最悪規模の原発事故の発生や各地での災害に日本中が悲しみと不安に覆いつくされた。

しかし、諸国の人々を驚嘆させた日本国民の「忍耐と努力」で日本国中に忘れかけていた「絆」が生まれ、支え合って助け合って、少しづつ、少しづつ明るい方に向かっていく。

昨年の九月に被災地の陸前高田市を訪問した折に「奇跡の一本松」の見えるガソリンスタンドの店主さんに、はからずも「ご家族は？」と尋ねてしまった。その時のうつむいて、堪える硬い表情が今も私の心に凍りついている。一緒に訪れた友人と命を奪われた皆さんに線香をたむけご冥福をお祈りした。

その後、産経新聞で「二度の津波語り継ぐ」と題し岩手県宮古市の「津波の語り部」として知られる田畑ヨシさん(八十六歳)の昭和八年の三陸津波を基に三十年以上前に自作した詩に深い感銘をうけた。その時の衝撃を筆に託して一番目の詩を約、新聞紙を広げた大きさの和紙に書きあげてみた。

一、突然襲う大つなみ

永久(とこしえ) 忘れんあの怖さ

家と流され諸人(もろびと)は

海の藻屑(もくず)と消えゆきて

無念の涙ほつたい

今、静かなる碧(あお)き海

悲しき海よ

ふるさとの海

そして、書きあげた詩の中に復興のシンボルとして被災地だけでなく全国に希望と勇気を与えてきた、七万本の中で唯一、生き残った「奇跡の一本松」にありがたさの感謝を込めて千切り絵で一本松を添えてみた。この作品は犠牲者の鎮魂と復興と忘れてはならない出来事として願いを込め、現在柴間のギター文化館に展示させて頂いている。しかしこの一本松は残念ながら蘇生が絶望的になり、関係者の技術を駆使してその『子供たち』を育てる事に成功し、「希望の光」を繋ぐ事が出来たそうである。またヨシさんの詩には曲が付けられ、若者達のバンドによって歌いつがれている。

天災は必ずやってくる。どんな困難にも乗り越えられる力を養っておかねばならない。中国のとわざに群竜無首「大勢の優れた人々(竜)が、首(能力)をひけらかさず互いに助けあうこと」という童に関することばにあやかっただ発展の年でありますように童の後押しを期待したい。最近の放映の中の被災者みなさんの本物の笑顔に元気を頂いています。

古い建物の多い旧石岡市街地は震災の爪痕も大部分修復され、あるいは建物が撤去され寂しさも感じられますが、まちかど情報センターを中心に

御幸通り、香丸通り、中町通りのみなさんの意気込みを昨年の暮れに触れることが出来ました。石岡市歴史ボランティアの会としてガイドの折りに街のみなさんの声も参考にさせて頂く為にも皆さんとの触れ合いを大切に行きたいと思えます。昨年の十一月にわたし流の歴史ガイドブックを「ふるさと風の会」より「兼平ちえこのふるさと散歩、歴史の里いしおかめぐり」を発行して頂いた。稚拙な絵と案内文ですが特に石岡市民の皆さんには健康増進を兼ねて石岡の歴史を尋ね歩いて頂き「歴史の里いしおか」の再認識にお供させて頂き、そして「高評頂きましたら幸甚に存じます。このガイドブックはまちかど情報センターとギター文化館にて販売してあります。主な内容として旧石岡市内を①高浜神社より古墳のある北根本、田島、茨城、貝地方面を巡る②旧石岡市内の神社を中心とした歴史探訪コース③柏原池、染谷、村上地区方面コースと三コースに分け、いずれも徒歩で三時間位のコースとなっています。どうぞよろしく願いいたします。

希望の年に

小林幸枝

あけましておめでとございます。新しい年を迎え、皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

昨年は東日本大震災およびそれに関連して発生した事故などで大変な年となってしまいましたが、「ことば座」が五周年を迎えたことで、そのご褒美なのか私にとっては大変嬉し年となりました。

海嘯(かいしょうつなみ) 鎮魂の詩

2月に陸平をヨイシヨする会の招きで、縄文の森コンサートに出演させていただき、そのときにモダンバレエの柏木久美子さんという大先輩との共演という初めての体験をさせていただきました。この共演が縁で、6月にはことば座の定期公演で共演を頂きました。柏木さんとの共演で、自分の手話舞に大きな影響をもらい、自分でも一皮むけたかもしれないという実感を、11月公演の時に得ることが出来ました。

私にとつてはとても嬉しい中、今年八月に、柏木さんとの共演で香港公演が具体化してきました。夢のような出来事が、今年の私に舞い降りてくれるようです。

石岡しか見えない、見ないといった小さな思考になるな、と白井先生から言われていましたが、色々なことが少しずつ大きな渦となって回って、自分を体験すると、自分は大成すると信じて努力すれば必ず何時か報われる、という言葉の重みが実感として湧いてきます。

柏木さんと出合い、共演させていただくことによつて、白井先生から台本を通訳する舞を作つてはダメ。台本を手話の心に翻訳して大きく流れる動作にしなさい、と言われてきた本当の意味を少し理解できるようになってきました。

去年、5周年記念となる11月の定期公演では、ギター文化館のギター講師大島さんと、クラシックギターとのコラボレーションが実現でき、私の舞表現の幅も一回り大きくなってきたかな、と秘かに思ったりしています。

今年も、応援、どうぞよろしくお願いいたします。

人類学では、アイヌは縄文人の直系の子孫、縄文に渡来系の血が混ざり合ったのが日本人というのが定説になっている。そうであれば習俗や言語もそれに連動して推移してきたはずである。アイヌ語は縄文語を受け継ぎ、日本語もまた縄文語を引き継いできたはずである。ただし、日本語の方は混血が進み、源流を見分けることも語源を極めることも困難になっている。しかし幸いにも、縄文直系のアイヌ語が日本語の源流のサンプルになる。そこで、アイヌ語を援用して、この地の縄文由来の地名を解き明かしてみようと思う。しかし、アイヌ語はアイヌの言語だ。アイヌ語地名があるのはそこにアイヌがいた証拠だ。という意見がある。だが、アイヌが日本人の前に姿を見せたのはおよそ鎌倉時代からである。それなのに、より古い文献、あるいは思いもよらない遠い地域でも、アイヌ語で解読できそうな語彙や地名が数多く発見できる。茨城の地も例にもれずに、今でも多くのアイヌ語風の地名や生活語が残っている。それならここに、かなり多くのアイヌが長期間住んでいたはずであり、それを示すものがあるはずである。ところが、何も見当たらない。ということ、ここで生活していたのはアイヌではなく縄文人であり、使われていた言語もアイヌ語ではなく縄文語だったのである。それを、今に残るアイヌ語で解読してみたいと思う。以下、近代アイヌ語であるとともに、縄文語と見ても不都合はないものを【1】で示した。そのほとんどは、知里貞志保『地名アイヌ語小辞典』（北海道出版企画センター）を出典している。

松本清張の短編『巨人の磯』は茨城県の北部、五浦と大洗を舞台としている。両地を結ぶ地域はこのたびの津波で大被害を受けたが、そこはまた、縄文語地名の宝庫でもあった。



スケガワ＝鮭の川

語源

「助川（スケカハ※現日立市）の駅家（ウマヤ）あり。一河に鮭を取るが為に、改めて助川と名づく。俗の語（クニヒトのユトバ）に、鮭の祖を謂ひて須介と為す（サケのオヤをイひてスケトナす）。」〔常陸国風土記 久慈郡〕という奈良時代の記録が残っている。簡単に言うと、常陸国の人（ヤマトから来た渡来系支配層が見た縄文系在来層）は国の言葉（縄文語）で、鮭の親をスケトと言う。助川は鮭川のことだ。という意味だ。

また、「蝦夷語（※ここではアイヌ語のこと）はシケトと言う」〔東蝦夷日誌 松浦武四郎 1860〕とある。奈良時代の常陸で親サケをスケ、アイヌ語にシケ。常陸の縄文系在住民は、いわゆる「上代東国方言」の「ju」の転音によつて、そのシケをスケと発音していたわけだ。サケ『和名抄』佐介（サケ）はそれら sike・suke の ju→a、sake。地域によつては syake シヤケに転音した。そのスケ・シケ・サケ等の語源はなにか。考えられるのは、

【1】①本当の、②大きな、③親の【chep】[chep の食物、④魚、

⑤鮭] ch かわれわれが食う p 物] である。この sichep が sike になるには、ch→k と p→t の変化を伴う。東北や沖縄では、キリ（霧）をチリと言うように、k に対する古い発音の ch が残っている。

また、奈良時代にヤマトから派遣された官人や江戸っ子の松浦は語尾の p (pu から n を除いた p。無声・非破裂音) の発音になじまないのど、それを sikep

と聞き取ったことなる①。

転音 sichep→sichep→sike→suke→sake/syake。

①語を構成する音節は末尾が母音の開音節と子音の開音節にわけられる。日本語は開音節のみで構成されるが、アイヌ語は開音節と閉音節で成り立っている。特に語尾の k・p・t、たごえは、nitat の発音は niataru の u を発音しない niataru にタツとなるので、nitat ニタと聞こえることになる。同様 に sikep は sikep となる。また、かすかに聞こえる語尾子音 をはつきり聞こえとすれば、たごえは、kap は kapa のように母音を添加することになる。

所在 今、日立市の助川は川名としてはなく、町名にだけ残っているが、吉田東伍『大日本地名辞書 坂東』(1903 富山房)には、「助川村と宮田村との界に溪流あり。是(コレ)助川の名を負(オ)へる所と見たり。今も折に触(ツ)しては鮭を捕(ト)らふる事ありと云ふ。」とある。鮭川が助川であるが現在は宮田川と呼ばれている。日立市街で今一番鮭が遡上するのは十王川、つぎが鮎川、鉾山の影響が宮田川にはほとんど姿を見せないという。

那珂川沿いの水戸市大字上国井に、違う当て字で小字介川(スケガワ)がある。姓を見ると、日立市や水戸市には助川さんが非常に多いが地域的には分散している。水戸市上国井に隣接した那珂市戸、少し上流の同市瓜連、涸沼川左岸の茨城町小鶴などには助川姓が固まっている。鮭は利根川にも遡上するが、それから分かれる霞ヶ浦の最奥の高浜入りに流入する恋瀬川に、3面コンクリートの「山王川都市下水路」がつながる。07年の12月、そこにつがいの鮭が汚い湖をはるばる遡り、わずかな泥土を散らして産卵場を造っていた。岩手の鮭は清流にもかかわらず、「南部の鼻曲がり鮭」と言われるが、彼らはよく鼻が曲がらなかったもの

だ。その恋瀬川上流の筑波山東麓、石岡市小幡地区には助川姓がかたまっている。同じ霞ヶ浦の最奥の土浦入りに流れ込む櫻川の上流、筑波山南麓つくば市白井地区では、鮭(スケ・鮭の別字)川姓が助川姓を圧倒している。白井は【usi】その入江、【灣】に遡ると考えられ、往古入江になっていたことを偲ばせる地形であり、そこに筑波山からの多くの細流が合流する。大貫とか沼田が隣接する。

関根川

セキネガワ 鮭の川

語源 かつての同僚に助川さんと関根さんがいた。二人は赤の他人らしいが、語源的には兄弟だった。とは言っても、助川も関根も漢字の意味はわからない。助と関の発音は近いが、川と根は隔たっている。それなのに、なぜ兄弟なのか。日立市の北隣が高萩市。その上手綱を流れる狭い浅い砂床の関根川には、今でも鮭がたくさん遡上し、捕ると罰せられる旨の立て札がある。そのセキネのセキは、この地では「と」の区別がでなかつたから、「蝦夷語」のシケ(鮭) sike の「と」が逆転して sek-seki。連母音のアイが単母音化されると原則としてエとなるので②、ナイ nai すなわち【nay 川】がネ ne。セキネも鮭川であった。関根だけで鮭川の意味があつたが、その語源が忘れられ、さらに川をつけたものであろう。

転音 sichep→sichep→sike→seki/nai-ne。

②アイヌ語の語彙には母音の連続が見られたが古代日本語の語彙にそれが現れない。そこで、縄文語が日本語に受け継がれるとき、原則として、連母音の単母音化を余儀なくされた。

その方法には、一方の母音を落とす、両母音間に子音を挟む、両母音を融合して新たな単母音とする、などがあつた。福島

茨城北部にはその縄文語が残っている。「炭鉱通いはよう、どんと、主のためナイ。はやるやったナイ」(『常磐炭鉱通』)

所在

それなら高萩市以外にも鮭の遡る関根や関根川があるのではないかと探してみると、上記日立の宮田川沿いに宮田町の小字に**関根**。宮田川は助川とも関根とも呼ばれていたわけだが、関根の方がより古い呼称であることは言うまでもない。北茨城市では華川町下相田(ソウダ)に、関根、同じ華川町の中妻にも、関根がある。両地には町名華川にゆかりのある花園川が流れているので、その花園川を関根と呼んでいたに違いない。土浦市佐野子の前記桜川沿いに小字関根、大洗町磯浜町にも小字セキネ、これは涸沼川のことであつたらう。そこに関根姓が集中している。日立市にも関根姓は多いが地域は分散している。そのほか、常陸太田市では源氏川沿いの上大門町、山田川に臨む岩手町に関根姓が集中している。

無川・尻無川

クチナシカワ・シリナシカワ
川口のない川

語源と所在 霞ヶ浦の高浜入りと土浦入りが分岐する対岸は行方市で、梶無川が開口している。それは別名オチャクナイとカナ書きされる川で、【oputchaknay】口無川、尻無川。尻、川尻 put 口 sak 欠く/nay 川

がアイヌ語(縄文語)にある。しかし、川口無し、川尻無しは同じことなので、尻無川と言ってもよく、それなら【oputchaknay】で、このオチャクナイそのものである。川の水が少ない冬季に、猛烈な西風が起す高波が川口の砂を揺り上げてその川口をふさいだことであらう。あるいは、口無

川の「*na*」が梶無川か。その梶無川の別名が**関根川**。恋瀬川や櫻川に鮭が遡るなら、同じ霞ヶ浦に注ぐ梶無川にも遡ったはずである。北茨城市関南町神岡上にも細流ながら尻無川がある。今は三面コンクリートの排水路になって砂丘を突き抜けているが、これも、川の水が砂浜にしみ込み消える川尻の無い川のことか。

里根川・里川

サトネガワ・サトガワ＝水無し川

語源と所在

東北新幹線は、栃木県のなすしおばら駅手前で那珂川の支流蛇尾(サビ)川をまたぐが、そのあたりの地名が那須塩原市**関根**である。しかし、「こまで鮭が遡上したかどうかはわからない。縄文人がかつて常陸でつけた関根地名を川沿いに奥地まで運んでいったのかもしれない。その蛇尾川は、はるか上流から関根あたりまではゴロタ石続きの伏流となつて下り、姿を現さない。そこで、縄文人はそれを【satpinay=sat 水のかれている】/pi石の(hay川)と呼び、後世それを sahhigawa サビ川と呼び変え蛇尾(ジャビ)川という漢字を宛てた。アイヌ語(縄文語)では閉音節(音節末尾が子音)もあるが日本語では開音節(音節末尾が母音)だけである。したがって、縄文語が日本語に移行する場合、その子音を消去(さ#)するか、子音のつぎに母音を追加(sato/satu)することになる①。前者の例がこのサビ川で、後者の例が次のサト川やサトネ川あるいはオサツ、オザトなどである。北茨城市華川町車の小字名に**小里**(オノサト)。これは、【osat=0川尻satかわつてる】か【wor水】【satかわいている】の開音節化、osatun か worosatun が

考えられる。花園川への合流点付近の根小屋川の川尻が干上がる時季があつたのではなからうか。同市関南町の小字名と川名に**里根川**、これも【satnay=sat 水のかれている(hay川)】→satonai→satone 里根であろう。ナイはネになった。渇水期に干上がる川、あるいは、水が川床の砂や砂利に吸い込まれて水がなくなる川がサトネ。沢尻川が流れる同市中郷町松井には**里内**(サトウチ)。

これは、【satnay】に里内(サトナイ)をあて、それをサトウチと読み替えたか。そのほか、常陸太田市に、『常陸国風土記久慈郡』に載る薩都河(サツカハ・現・里川)、薩都の里(サツノサト・現・里野宮町)、延喜式内社の薩都(サツ)神社があり、里川の上流には小里、所在地未詳の雄薩(ヲオサツ)などがあり、satやosat、worsatuとの関係が浮上する。

転音

osat/worsat→osat/wor#satu / satpinay→sahhigawa / satnay→satone→satogawa / sat→sato/satu

崖

アカ・バケルガケ

語源

沖縄久米島阿嘉(アカ)の元の集落は、三方絶壁をなす下にあつた。慶良間の阿嘉(アカ)島は島全体が三方絶壁をなしている。それについて、地元の識者は、「沖縄の地名にはしばしばアイヌ語が残っているとされるが、千島アイヌ語に崖を aka というのはこれと関係することがあるか。」(宮城真治『沖縄地名考』沖縄出版)と語っていた。そのアイヌ語では、【aka 崖、岬、山稜】である。絶壁の下にくらす住民の発想からすれば、【a 我ら】の【ka 上】が語源かもしれない。前橋からの赤

城山は、【aka 崖】(Kim山→Kim(子音語尾は飲み込まれる))、日光の赤薙山は【aka 崖】(na切る)【ke 削る】崖崩れの山ということであろう。

さらにアイヌ語(縄文語)に、【pake 頭、岬頭、出崎の突端の崖=pa 頭、崎、ふち(ke 部分)】があつた。茨城・千葉にあるバツケ・ボツケ(崖はこの pake の濁音・促音化。ハケ(埼玉県秩父郡・神奈川県津久井郡・山梨県北都留郡・東京国分寺市の殿ヶ谷庭園 崖)は清音化である。非常に多い(hb)→k(g)の転音で、ハケはカケ・ガケに、バツケはガツケ(岩手・茨城猿島・三重)に移つた。また、茨城の地名にはアカとの合成語も多い。

転音

aka→aka / pake→hake→bake/bokke
→gake / hake→kake→gake

所在

赤法化(アカボツケ・牛久市岡見、赤法家(アカボツケ・常総市倉持)、赤法華(アカボツケ・水戸市下野町)、赤バツケ(同市有賀町)、赤法毛(アカボケ・桜川市福崎)、南バツケ・場欠(バツケ・常陸太田市薬谷)、法花・法花崎(ボツケ/ボツケザキ・つくばみらい市城中)、木化下(ボツケシタ・同市狸穴)、発毛(バツケ)・ボツケ(行方市根小屋、ハツケ山・バツケ山(同市自選)、麦海・末開(バツカイ・同市中郷)、発毛下(バツケシタ・かすみがうら市下土田)。当て字はほとんど出揃つたかと思われるが、これらから、北茨城市華川町花園の赤法花(アカボウバナ)もアカボツケが原語だつたのではなからうか。花(ケ)を華川や花園に引かれてハナとしたのかとも思われる。

水戸市の大字に難読難解で有名な木葉下（アボツケ）がある。その発音と語義は例のアカボツケに由来し、akaのkの脱落aha（例『和名抄』紀伊国在田郡湯釜(yukasa)郷→現・和歌山県有田郡湯浅町湯浅(yukasa)）でアボツケか。当て字の木葉下から見ると、ハケ（鹿シタ→葉木下→ハボツケ、haのhの脱落（例『和名抄』越後国頸城郡原(hara)木郷は荒(hara)木郷と別記）でアボツケ、葉の木の下はないから木の葉の下としたのではなからうか。（次号につづく）

理解することとは難しい 伊東弓子

晩秋に、身近な人の選挙が終わった。市内で大きな問題を抱えている中、市民の関心は強かった。私もその中の一人だった。結果が出た後若い当選者が寝返った。回りからの誘いか。上の人からの指示か。子細は分からないが、これには驚き、失望した。運動していく中で本人に変化が起きたのか、本人が決断したのか、それにしても大勢の人に選ばれた事に対して無責任だと思ふ。それだけに傍聴にも力が入った。議場内でも先輩に劣らぬ堂々さは太々しく見えた。人としての礼儀は持ち合わせていないのかと残念に思いながら見、聞きしていた。この席に座る迄に、本人が議員としての姿勢を知って貰う為に多くの人の手足をお借りしただろうに、それをも無視出来るのは大した者だ。これも世渡り術の一つかと思わざるを得なかった。

秋には、私も身近な人を理解して貰う為に人を

尋ね歩いた。それは勇気のいる事だった。家の前で気持ちを落ち着かせて門を叩く。長い庭を歩く。鉄の扉を開ける。チャイムを押す。声をかける。人に合う迄に幾つもの工程を費やす。その揚げ句、奥の方から、二階から「チラシ入れておいて」の

声には衝撃が走った。扉が開いて「どうぞ」と言ってくれるがほんの少し開くだけ。上がり縁から体を弓のようにして扉を持って話す。靴下で降りてくる人。座って話を聞いてくれる人と色々の顔に合った。それに対処する私はその度その度が努力だった。戸が開いていたり網戸になつていたり、受け入れてくれる人かと喜びが湧いてくる。話の後も様様だった。自分で静かに閉める。ボタンと閉められる時。鍵をかける音がする時。灯りが消されてしまう時など背中に冷たいものを感じながらその場を去った。勿論暖かい言葉や励ましの言葉も言ってくれた人もいる。昼間は人が居なかった。農村地区も町並みにも人が少なかった。何処へ行ってしまったのだろうと思う程だった。ただ犬が恐ろしく庭先で、裏で、家の中で吠えたりする。「悪い事しに来たんじゃないよ」と怪しい気持ちになる。子どもも大人も老人もいない。夕方はみんな戻るのだろうと期待しても塾の送り迎えに忙しい。それぞれの家庭生活の中に入つて行つて、一日や二日一週間の間に分かつて貰おうというのも厚かましいと思ひながらも、兎に角歩き続ける事だった。身に振りかかって始めて分かる苦労だった。留守の場合チラシとメモを入れてくるが地区によってはポストが半分位迄入っている。これでは見る事もなくごみ箱へ行くだろう。（実際にあるという）又入っていた物を全部取り出し自分のチラシだけ入れてくるという事もあるそうだ。

私は違う方法をとった。紅葉が肩に舞い、敷き詰められた山茶花の花びらに心癒された。

今回コミュニケーションをとる事の大変さを感じた。一家でも一つ屋根の中に母屋と若い人の建物が別にあると、情報が行き来する事が殆どない事がわかった。地域の中での回覧板も徹底して理解される筈がない。行政側はお知らせしてあるとよく言うが、コミュニケーションとれない中では情報も流れない。組織活動や共同作業をしている中では多くの人に早く伝わり判断の元になると頷けた。

話題も様様だった。それに答えたり共通の話題に花が咲く事もあったが、議員に対して誹謗中傷も出た。誤解されている面もあった。やりたいんだよな。何か貰えんのか。どんな積りでやんのか。何の為にやんだ。儲かんのか、月に何度も出ないのに金はいっぱい貰えんだな。バツチが欲しいのか。志はいいけど希望に繋がつか。と切がない。ただ薄笑いしているだけの人。聞くよりも自分の話を押し進める人、と色々だったが我慢して聞いた。本人の考え方を知らうとしてくれる人、励ましてくれる人も勿論いた。

人間だから欠点も欲も態度の差も沢山あるだろう。だからといって土建らがやっただけ。土百姓らがやっただけ。医者や坊主がやっただけ。この町はよくならない。おまけに「馬鹿な奴等」とか「勤め人が退職したからやっただけ俺等の苦労は分ない」と罵ったって仕様がな。じゃ誰がやればいいのかと聞きたい。誰でもやる資格はあるのだから、どうぞやってくださいと言いたいが、堂堂巡りをしているだけになる。誰もが出来る。その基

本にたつて代表を選ぶんだらうと思う。誰達の為に選ぶのかを考えれば当然選ぶ人達の責任がある。選ばれる側にも代弁者としての責任がある。双方とも責任を感じずにいる事が信頼のなさに繋がっている様に思う。

挿話言つても人を知るといふ事は大変なことだ。名前も顔も知らない。繋がりのない、から始まって人を分かるためには時間がかかる。又分かるうとする気持ちを持ち続けていくことだと感じて、知らない土地へ知らない人達の所へと人を信じて歩き続けた。

二ヶ月は沢山の試練と勉強をさせてもらった。そこで人間の救い難い姿、それおも捨て難いと拾い上げて行かれる大きな力に包まれていると、信じてその後から付いていった私だ。

その道々、先人達の凄まじい歴史を思い出していた。二十年代玉川村地区は革新的な若い人が常にリーダーとして勤めていた。田余村地区は所謂旦那様が村長として勤めていた。議員は部落で推薦の交代の形をとっていた。私が初めての選挙は衆議員選挙だった。立候補者の事など何もわからずに、ただ奥さんが玉里の人という事で勧められての投票だった。選挙の意味も確りとは分からないままだった。その後少しづつ世の中の事が見えてきて、仲間との学習の中で判断する力を貯えていった。昭和の合併で二つの村が一緒になると選挙の形も変わった。若いリーダーと旦那達の戦いだったが、毎回若いリーダーの勝利であった。霞ヶ浦高浜入干拓問題では大きな戦いとなった。部落の角毎に昼は見廻り、夜は火を燃しての警戒と、他から選挙運動に入つて来ない様にとの見張りだった。その後は村を二分しての戦いが続いた。長い事治め

てきたリーダーと新しい人を担ぐ人達との間で繰り広げられていった。今迄の農村地帯と工場地帯に住む新しい住民が増えていく中で大きなうねりが起きた。一家の中でも年寄りや若い人達の考え方がはつきり表れた時期だった。長から議員選挙も二派に分かれて、品物やお金が進んだり、怪文書を書流す者がいたり、後々迄恨み辛みを残していた。電話妨害、無線や盗聴器などの妨害があったり、トーホーランドにヤーさん車が入っていると不穏な状況が続いた。こんな励しい分捕り合戦も三町村が市になる直前で消えようとしていた。

合戦を繰り返してきた議会も悪い事ばかりではなかった。二派が切磋琢磨：というより鎗を削って討論し合ってきたものは多面に良い結果を残していった事は事実である。それは市になって分かったが、小川や美野里には無いものが作り上げられていた。村民は色々な思いで暮らしてきたが、豊かなものも沢山育ってきた。こんな大切な時に頭になる者の力量を見極める事が出来なかつた為に舵取りは大きく変わった。にもかかわらず合併しなればよかつたと良く聞く。じゃあ戻せませんか。あの議員はどうしようもないと言う。じゃあ止めてもらえますか。そういう道を選んだのは他ならない私達だと気づくことです。

関心があるから批判するのだらうと思う。批判するだけでなく相手を知る努力をしよう。文句だけじゃなくて、個人の気持ちを何らかの形で表して動くようじゃありませんか。

十年前、情けない思いをしたからこそ「これだ」と決めたことがある。あの時「あいつら」「議員のやつら」と悪口雑言を浴びせられながら応援してくださった6人の為にも議員のことを知ろう、理

解しよう」と議会の傍聴を始めた。短時間でそう簡単に理解できるものじゃないと思う。その中にきつと少しづつ見えてくるものがあるように思う。議会の階段を一段登るにも勇気がいる。行動に移すということはこんなにも勇気のいることだと改めて思った師走だった。

「傍聴人がいない」と議会がこてにまわる。傍聴人が一人でもいることは、とても大事なことです」と、ある長老が話してくれた言葉にも支えられて行っている。

あけましておめでとうございます。

ギター文化館は今年で20周年を迎えます。魅力あふれるコンサート企画で皆様をお待ちいたしております。どうぞよろしく願いいたします。

2012 CONCERT SERIES

- 1月15日 ハビエル・ガルシア・モレーノ コンサート
- 1月22日 デュオ・パリサンドル ギターコンサート
- 1月29日 小沼ようすけ&金澤英明 ジャズライブ
- 2月 5日 ジュディカエル・ペロワ ギターリサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

《特別企画》

虚構と真実の谷間

第四章 霧の中の栄光 (1・2)

打田昇三

西暦六四五年六月、大化の改新という名のクーデターにより蘇我王朝が倒れ近畿地方には新たな王朝が出来た。しかし、クーデターの首謀者である中大兄皇子が即位せずに居たことなど、この時代の日本は大陸との関係で謎が多い。西暦六五五年、中大兄皇子の母親が六十二歳で再度の皇位に就き斎明天皇となった。この天皇が陸奥国と越(北陸)の原住民代表各百人ほどを宮中に招いた記録があるから、その頃は曲りなりにも縄文の人々と弥生人との関係は険悪でなかったと推測したのだが、これは誤りであった。

新たな大和朝廷は、出羽国への縄文人封じ込め基地として「淳足柵(ぬたりのさく)新潟市近郊」を設置し、翌年には「磐舟柵(いわふねのさく)山形県鶴岡市付近」を設けて先住民族を隔離したのである。これは斎明天皇がパーティーを開いた年の七年前である。新政府は「ケチな飴と強力な鞭」で先住民族を統治しようとしたのであろう。そして斎明天皇の四年(六五八)の春、越後国守となった阿倍比羅夫(あべのひらぶ)が一八〇隻の船で出羽(秋田、山形)方面に侵攻した。

此の時にも「蝦夷の大衆を集めて御馳走した」と記録されているが、何を食わせたのか分かったものではない。どうも、この頃の東北地方は大和朝廷軍のほか「肅慎(あしはせ・みしはせ)中国東北部から現在のロシアに居たモンゴル系狩猟民族」の侵略を受けていたらしく、蝦夷の人たちは背に腹は替えられ

ず、大和朝廷軍に服属するふりをしたと思われる。阿倍比羅夫は「肅慎」と戦い五十人ほどを捕虜にした。一年後には軍船を二百隻に増やし、多分、北海道にあった肅慎の本拠を攻めて親玉を討ち取った。この大規模な遠征を疑問視し、阿倍比羅夫の自己PRではないか?と疑う意見もあるらしいが、常陸国風土記・香島郡の中に「朽ちた大船」の記事があり、天智天皇時代に陸奥国で国覓(くにまぎ)開拓に使った難破船だと記録しているから、嘘でも無いらしい。

蝦夷の人たちは、肅慎を討つて貰って助かったのだが「熊に狼退治を頼んだ兎」のようなもので、虐げられることに変わりはない。恩に着せて難題を要求されている。大和朝廷は、肅慎退治の後で国際関係がギクシャクしていた唐の国に、阿倍比羅夫が連れて来た縄文人の男女を珍しい人類のサンプルとして贈り当時の唐の皇帝がパンダでも見るような顔で見ているとされる記録がある。これは人間を動物並みに扱ったことになる。その罰で阿倍比羅夫は朝鮮半島に出陣し「白村江(はくすき)のえ」の戦いで唐・新羅の軍に敗れた責任を問われ九州へ飛ばれた。それ以後の政府は北方に軍を置き、基地として柵を強化する一方で、時には蝦夷の首長に爵位を与えたり、思い付きで会食したり、突然に交際を禁じたり、或いは関東の民を東北へ移住させるなど、あれこれと一貫性の無い政策で蝦夷対策に苦心をしていたと思われる。

当然ながら歴代天皇により、蝦夷に対する関心の度は異なっていた。石岡市には、此処を桓武平氏発祥の地にしたい人がいるようなので何とも言い難いのだが、実は本格的に蝦夷征討を企てたつまり日本古来の民族を最も圧迫したのは桓武天

皇である。「それは嘘だ!」と顔色を変える方が居られるかも知れないが、これは「蝦夷征討」が堂々と正史に記録されているから嘘とは言えない出来事なのである。僭越ながら桓武天皇に代わって言い訳をさせて貰えば、桓武天皇が即位をする前年、未だ皇太子・山部親王でいた光仁天皇時代の寶龜十一年(七八〇)に起こった或る事件が大和朝廷による蝦夷弾圧強化の切っ掛けにはなっている…。

寶龜十年に陸奥守と出羽按察使(あわせちし)監察官を兼ねて赴任した紀広純と言う高級官僚が居た。名門貴族である。その支配下に蝦夷の出身で郡の役人に補されていた伊治皆麻呂(いじのあたまろ)が居り、性質が剛毅な人物として知れ渡っていた。皆麻呂には交際の美人がおり、そこに通っていたのだが上司の紀広純が、それを聞いて横恋慕をし権力を嵩に口説き始めた。女性は嫌がる。そこで広純は国主と監察官の職務を有効に使って、その女性を奪い、館に連れ込んで寵愛すること職務より熱心であった。

これを知った皆麻呂は、心中に深く恨みを抱きながら表面上は何事も無かったように振舞っていたので広純も油断をして皆麻呂を信用するようになった。そして寶龜十一年の春、皆麻呂は突如として自分の徒党二百余人を率いて国主の館を襲い広純を討ち、役人が貯め込んだ財宝を奪い、館に火をかけたのである。この報に接した朝廷は直ちに「蝦夷基地救援隊」を組織し、藤原北家の小黒麻呂に指揮を命じたのだが、勢いに乗った蝦夷勢を抑えることなど出来る筈も無かった。そのうちに「安達八郎」と名乗る英雄気取りの盗賊まで現れて、東北方面は手が付けられなくなった。原因は「紀広純」と言う大和朝廷の馬鹿役人に有った

のだが、それを明確にすると輝かしい国家の歴史に傷がつく。支配者の論理として「背いた罪」だけが取り上げられるようになったのである。

新たに蝦夷征討使節の任務を受けた藤原南家の継縄は、先ず陸奥国府の近くにある寺院の僧侶を介して盗賊の安達八郎を手なづけ味方につけた。

三流サスペンス並みの懐柔策で八郎を皆麻呂に接近させた朝廷軍は、その上で翌年の夏に皆麻呂の本拠地を襲い八郎に内応させて、ようやく退治することが出来た……この話は調子が良すぎるから

「嘘」にも思えるが、征討軍がまともに戦っても皆麻呂には勝てなかったことは想像出来る。藤原一族と違つて「騙し」や「策謀」に弱い光仁天皇には大きな精神的負担を生じさせたようで、皆麻呂の事件が未解決のままであつた頃に退位を思いつき桓武天皇が登場することになった……光仁天皇は深く傷ついていたので退位後は半年も持たずに亡くなった。その年の十二月二十三日である。

山部親王こと桓武天皇は天應元年（七八一）四月三日に即位し、皇太子には同母弟の早良（さわら）親王を立てた。光仁天皇は会社なら定年になる六十二歳で、十二年前に藤原一族の思惑から成りたくもない天皇に担ぎ出されたから在位期間は短かつた。当然だが長男である山部親王も皇太子になつたのは不惑を過ぎてのことである。実は山部親王の母親は百済系帰化人であつたことから皇太子になる可能性は全く無かつたのである。

光仁天皇の皇太子には、皇后との間に生まれた他戸（おきと）親王が立てられていた。皇后は聖武天皇皇女の井上（いのえ）内親王である。それがどうして変わったのか……寶龜三年（七七一）三月二日に、突如として井上皇后及び皇太子の他戸親王が

逮捕されて、北葛城に幽閉される事件が起こつた。「他戸親王を早く皇位に就ける目的で光仁天皇を呪詛した……」という怪しい罪である。

二人は自分を皇族から庶民に落とされ、直ぐに消された。これを「巫蠱（ふこい）の変」と言う不気味な文字で表す。この事件こそが日本史の最も得意とする「デッチあげによる嘘の名作」であり、全ては藤原百川らの筋書に依つてゐる。

藤原一族は始祖の鎌足が大兄皇子と協力して蘇我王朝を倒した。天智天皇の没後「壬申の乱」で政権は大海女皇子の天武天皇に渡り、以後は皇統が天智系から逸れて称徳天皇まで来た。ここで井上皇后の生んだ他戸親王が即位すると、折角、光仁天皇で復活させた天智系皇統が再び天武系寄りになる。藤原氏はこれを避ける為に強引に桓武天皇を実現させたのであろう。桓武天皇は思いがけず皇位に就くことが出来たけれども「大嘘」で消された井上皇后母子は黙つて居られない。直ちに退位した先帝を病死させ、龍に化けて各地で崇りを現した。なぜ龍なのかは不明だが、比叡山を開いた傳教大師が龍の代理人として桓武天皇に掛け合い、神社に祀つて貰つたそうである。

藤原百川や兄の良継の努力と言うか、陰謀と言うか、強引な手段で皇位に付かされた桓武天皇は即位早々から面倒な事件に関わらされた。まず伊達政宗の祖先として紹介した左大臣・藤原魚名が、自分に全く覚えの無い「他人の嘘」でクビになり九州へ飛ばされた「氷上川継事件」があり、大勢の官僚が処罰されたために政務にも影響が出たと思われる。自分を担ぎ出した藤原兄弟はさつさと死んでしまつたから出て来ない。

即位の年は全国的に作物が不作で特に蝦夷防衛

の拠点に食糧不足が生じていた。東北地方は先帝（光仁天皇）時代から飢饉であり蝦夷征討軍は自分たちの食糧を確保するのが大仕事で、とても戦闘など出来る状態では無かつた……にも関わらず現地へ行つてゐた陸奥按察使の藤原小黒麻呂が「蝦夷の征討は終わりました」と帰つてきた。実際には何の成果も挙げていなかったのである。即位したばかりの桓武天皇はそれを指摘したのだが聞こえないふりをされた。堂々と「嘘」をつく古狸のような公卿には逆らえなかつたのである。そして光仁天皇が死亡したから、この問題はウヤマヤになり古狸は位階が上がつて新しい任務に就いた。現代でも天下り官僚が、それを真似ている。

氷上川継事件の翌年になる延暦二年（七八三）、出羽国で蝦夷が反乱した、という報告が届いた。「蝦夷対策」は何も出来ずにいた時期だが、これを何とかしなければ……。そこで、どういう思考感覚なのか、桓武天皇や高級官僚が思い付いたのは都を奈良から何処かへ移すことであつた。蝦夷軍の空襲爆撃を想定したかも知れないが、蝦夷空軍も熊蜂、雀蜂を集めた程度の戦力であつたらうから慌てて逃げる必要もなかつた。当時の平城京（奈良）は「仏教界の興隆で、墮落した坊主たちがひしめく巢窟」であつたと、看破した史書がある。

延暦三年の五月、東北地方の戦場から勝手に帰還して恩賞だけ頂いた藤原小黒麻呂と、宇合の孫で桓武天皇の信任が厚い藤原種継が新首都の候補地として山背国乙訓郡長岡村（京都府長岡京市）を視察し、其処に都市を遷すことが内定した。「すぐやる課」が在つたと見えて長岡京建設移転の準備は迅速に進められた。

ところが、ここで奇怪な事件が連続して起こり

桓武天皇は蝦夷征伐どころではなくなる。蝦夷地にとっては良かったのだが、事件の後の大きな反動で本格的な蝦夷侵攻が開始されることになる。

長岡京は突貫工事で延暦三年（七八四）の十一月に御所が出来上がり正式に遷都が行われた：とは言っても、官庁施設や町は未完成である。翌年の秋に、桓武天皇や政府関係者の殆どが奈良の旧都に出かけて直ぐには戻らなかった。新都には留守役として皇太子・早良親王（桓武天皇の弟）が留まり、補佐する右大臣・藤原是公（第三章後編で紹介した藤原氏の祖）と、権臣の中納言・藤原種継と、その家来ぐらいが残っていた。

桓武天皇の信頼を楯に強引に事を進める種継に對しては、皇太子を含めて敵對勢力のようなものがあり端的に言えば種継の評判は悪かった。九月二十三日の夜、執務中の種継は何者かに依り二本の矢で胸腹部を射られた。即死では無かったが、遺言を残すことも無く翌朝には絶命した。急報を受けた天皇は、平城京から車駕を還し、直ちに犯人の詮議が行われた。前々太平記には早良親王が黒幕のように記述してある。しかし歴史学が進歩した現代では、そういう単純な「嘘」には誰も納得をしない。記録では一週間もしない中に皇太子を廃されているから一番に疑われた訳であるが、刑事ドラマでも最初に捕まった人物は無実なのが定番である。実行犯は逮捕されたが、早良親王が「ホシ」にされたのは他の理由があったからで、それは皇位継承の暗闘によるらしい。

桓武天皇の皇后は擁立に功績のあった藤原良繼の娘・乙牟漏であり、その間には安殿（あて）親王こと、後の平城（へいぜい）天皇が生まれていたから、藤原氏にとつては桓武天皇の同母弟である早

良親王よりは安殿親王を立てたい：で、どういう計算なのか難しくて分からないが、早良親王が廃されて、十二歳の安殿親王が皇太子になるのである。意味不明な逮捕状を貰った早良親王は、考える間もなく「淡路島に流罪」を宣告された。法廷で抗議しようと思ったのだが、事情が読めると呆れ返って、一時的に幽閉された寺で飲食を絶ち「無実を主張」する死を選んだ。規則を守る役人は決められた通りに遺体を淡路島に埋葬した。それだけで終わると、忘れ去られてしまうので早良親王も怨霊となって各地に祟りを成した。慌てた朝廷は「崇道天皇（すどうてんのこう）と諡（おくりな）をして神に祀った：そのようなことなら最初から無実の罪を着せなければ良いのに：。

この事件の発生によって、東北地方にとっては一時的だが救われたように中断していた「蝦夷侵攻」が再開されたのは延暦六年（七八七）頃からである。まず、現地の監察官に命じて領内での小さな争いごとを禁止させた。小競り合いにより蝦夷勢力が強大化することを恐れたのであろう。

延暦七年（七八八）は比叡山に延暦寺が建立された年であるが、「：四月に至って去冬より雨降らざること己に五箇月なりしかば、溝池水乏しく、百姓耕種する事を得ず：（前々太平記）」とあり、全国的に天候不順であった。この為に東北地方でも食糧不足による略奪事件などが発生し、それを口実にして大和朝廷の蝦夷征圧事業が本格化したと思われる。先ず東北地方経営の拠点であった多賀城に諸国から備蓄食糧や塩などが搬入された。

そして年末には正四位参議であった紀古佐美（きのこさみ）が征東大將軍に任じられ、吉日を選んで盛大かつ無駄な出陣の儀式が行われてから大軍

が奥州へ向かったのだが戦況は思うようにはいかなかった：当然である。殿上でチャラチャラしていた定年待ちの公卿に合戦の指揮がとれる訳がない。三十八度線に見立てた衣川を越えた所で目前に敵の大軍が出迎えてくれたから、そこで固まった。両陣営は辛抱強く「睨み合い」を続けた。

四月頃に、この情報を受け取った桓武天皇は呆れ返って「：聞く所によれば、官軍が川を渡って三か所に陣を置いてから五十日も動かないというが、湯治に行かせたのではないから早く任務を遂行せよ。兵は巧遅より拙速を尊ぶ」戦はスピードが勝負、と言うではないか。六、七月には雨で動きが取れなくなるぞ。無駄飯を喰っていは食糧も乏しくなる：」と懇切丁寧な勅語を下した。

此の有難い勅語に反応したのは大和朝廷の將軍たちでは無く「敵」にされた蝦夷の人々である。藁人形を使った作戦などで奇襲攻撃を繰り返して、ここで本格的に両軍の戦闘が行われた。その結果は自分たちを「官軍」とした連中の戦死千余名、負傷者二千余で、蝦夷軍の被害は八十九とある。

戦時中の大日本帝国だと「敵に甚大なる被害を与え、我が方の損害は軽微：」と発表するのだが、さすがに「嘘」はつけないほど負けたのである。ただ正式な国史には「：征討將軍戦況を奏して賊の頑強を言す（もつす）」とだけ記録された。將軍と呼ばれながら何もなかったオジサンは現地へ行っただけで恥じる気配もなく凱旋し一八〇度転換して平安京建設の不動産屋対策担当になった。

この敗戦に懲りて蝦夷との講和条約でも結ばば以後の日本も少しはマシな国になっていたとは思うのだが「大和朝廷」という大看板を背負っていると辞書には「負け」という言葉が無いようで、

性懲りもなく蝦夷征討の準備を、それも本格的に始めた。先ず革製の兵士用武具二千、本格的な鎧兜三千が軍需工場で製造され始めた。そして武蔵、相模、安房、上総、下総、常陸などの国々から米や雑穀など十萬石を奥州各地に運ばせた。その輸送費だけでも馬鹿にならない。

延暦十年(七九二)正月、東へ向かう各街道諸国の軍備状況を視察するため複数の武將が派遣された。そのうち東海道には百済系の人物と坂上田村麻呂の二名が充てられ、彼らは本当か嘘か確かめようがないが「各地の準備は出来ました」と報告したので、七月には大伴弟麻呂を「征夷大使(征夷大將軍の前身)」とする軍団が編成されて坂上田村麻呂は複数の副使の一人となった。この顔ぶれが実行したのは遠征では無く、遠征の準備だけだった(実際に出かけたのは延暦十三年)とするのは近代の史書であるが、古い史書は十年出發としている。延暦十三年は西暦七九四年「鳴くよ鶯…」二年や三年は、どうでも良いことだが、不思議なことに此処でまた「長岡京」の場合と同じように「蝦夷征伐」と同時進行で「遷都」の話が起ったのである。長岡京の場合は蝦夷の熊蜂空襲を恐れたことも無い訳ではなかったが、今回の遷都理由はオドロオドロしい幽霊が攻めて来るのではないかと尋ねる不安である。遠い蝦夷地からは空襲されるにも時間的な余裕があるが、幽霊は身近に棲み付いているので、その場所を離れる必要がある。で、その幽霊…と単純に言うとな怒られるから正確に言い直すと、幽霊でもA級の「怨霊(おんりよう)恨みを持っている幽霊」の正体は、突然に皇太子の座から引きずりおろされた上に罪人にされ無念の死を遂げた早良親王様である。

この怨霊の実力は凄いのので、先ず桓武天皇の実母(早良親王の実母でもある)高野新笠の寿命を縮め、皇后の藤原乙牟漏を三十一歳で他界させた上に、天然痘を流行させたり、伊勢神宮を盗賊に襲わせ火災で焼いた。皇太子に立てた安殿親王も体調が良くない。それも身体だけではなく精神的にも怪しい兆候が見える。これを何とかしなければ…命令を受けた陰陽師は久し振りの出番がきたので何もかも怨霊のせいにして遷都を勧めた。蝦夷地侵攻と再度の遷都、どちらも膨大な経費を必要としているから日常のことも大変である。

律令制時代の日本の正史「六国史(りっこくし)」の一つ「続日本紀(しよくにほんぎ)」にも「…輜重(しちよう)糧食・武器などの補給運搬)に従事する人員が一、二、四四〇人で、一度に運べる主食が六、二二五石、これを二七、四七〇人の兵士が喰らうと十一日しか持たない。基地から運搬するには往復で二十四日かかる…」と、愚痴のような記事が記録されている。これは衣川の砦だけを攻める際の人数であるから、戦線が拡大すれば数字は膨大なものになる。何のための蝦夷攻めか。

遷都と併せて訳の分からない大政策のために国民は重税に苦しめられた。攻められた奥羽地方の人たちは土地、家屋、財産から生命まで奪われた。どちらも庶民を苦しめただけのことであり、名称の「平安京」は「嘘」になる。本来は「不安京」と名付けるべきものであった。そのために新都となる盆地の四方には鉄の鎧兜で固めた人形を埋めて將軍塚として守らせ、山背(やましろ)国を山城国に改めた。奈良、長岡は捨てられたが、此の地は一〇七五年間、日本の首都だった。

大伴弟麻呂を將軍とした軍勢は数年で帰国したらしいが遠征の内容は不明である。その分の政府の公式記録が散逸していると言われるが、十萬の大軍を差し向けて伊澤(胆沢)一つを落とせなかったのが現実らしい。そもそも「蝦夷の反乱」と言っても征服者の論理によるもので、過酷に押さえつけるから背く。平城京へも長岡京へも、まして平安京には東国から蝦夷軍どころか雀蜂一匹も襲来したことは無いのである。

そして蝦夷地の民は言う迄も無く、強引に狩り出され戦場へ行かされた大和朝廷軍の兵士たちも勝てない戦いで命を削らされたから、脱走者が続出したらしく平安京遷都の翌年だけでも「諸国から逃亡した兵士が三四〇人」と記録されている。

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、
また大好きな雑木林に一滴みの土を分けてもらい、
自分の風を「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。
オカリナの製作・オカリナ演奏に興味をお持ちの方、
連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
Tel0299-55-4411

彼らは「死罪」が原則だったようで、特に恩赦をもつて陸奥の戦場へ送られた。勇猛な蝦夷軍と向き合う第一線であるから、死罪にして貰ったほうが楽だったかも知れない。脱走兵が多かったためかどうか、延暦十五年には関東及び北陸地方から住民九千人を強制的に陸奥の拠点へ移住させた。敵にも味方にも評判が悪かった蝦夷との戦いでどういう訳か一人勝ちしたように有名なのが「坂上田村麻呂(さかのうえのたむらろ)」である。「一将功成りて万骨枯る」と言う諺のとおり、功名を成す將軍の陰に多くの兵士の犠牲がある。功績は代表者に帰す矛盾は、人間社会の最大の欠陥なのかも知れないが、坂上田村麻呂の場合は実に極端である。偉人としての評判が神社から寺院にまで及んでいて「征服者」の陰が消されている。かつて旧制第一高等学校の講堂には「文武の象徴」として菅原道真と坂上田村麻呂の肖像画が掲げられていたと伝えられる。プロの合戦屋さんが学問の神様と同格で良いものであろうか。

この個人的な疑問の答えらしき記録が天平時代のことを書いた史書にあった。皇位を継ぐべき男子に恵まれなかった聖武天皇は、第一皇女の安倍内親王を史上初の女性皇太子に指名し孝謙天皇が登場した。しかし次の淳仁天皇(天武天皇の孫)が恵美押勝こと藤原仲麻呂の反乱に連座して廃されたため、孝謙天皇は「称徳天皇」として重祚(ちようそ)せざるを得なかった。称徳天皇と仲麻呂は従兄妹同士になる。反乱の原因は「弓削の道鏡」が重く用いられたからであり、俗説でスキヤンダルが伝わるけれども、道鏡は「天智天皇の血統」とする説があり称徳天皇は、それを踏まえて弓削の道鏡に皇位を譲ろうとしたようである。

しかし周りがガタガタ言うので、称徳天皇も宇佐八幡宮にお伺いを立てた。此の時に使者に選ばれたのが天皇の側近女官である法均尼廣虫(ほうきんにひろむし)と弟の和氣清麻呂(わけのきよまろ)である。こいつらが藤原一族に尻尾を振り自分が仕える天皇の意思に反して「道鏡を皇位に就けてはダメと八幡様が言いました」と報告をした。公平な神様が皇位継承に注文をつける筈が無い。何の為の側近なのか：こうして弓削(ゆげ)天皇と言う暖かそうな名前が消えて、皇統は天智系でも藤原氏が選んだほうの光仁天皇(桓武天皇)に移ることになる。そして落胆した称徳天皇の怪しい急死により道鏡は謀反人にされてしまった。

この時に八幡様に文句は言ったかも知れないけれども「謀反を起こそう」などとは思ってもいなかった弓削の道鏡を「謀反」と密告した人物が居り、それが坂上田村麻呂とされていた。有力な黒幕が居たことは言う迄もない。この話の典故が「続日本紀(しよくにほんぎ)」なので念の為に確認したら密告者は田村麻呂では無く父親の坂上苺田麻呂(さかのうえのかりたまろ)の仕業であった。田村麻呂は未だ十五歳、受験勉強中である。

まわりくどい言い方をしたが、この史書の誤りのように「坂上田村麻呂」と言う人物は、大和朝廷が苦心していた蝦夷を曲りなりにも抑えたことから何もかも、この人物が成し遂げたように伝えられているのではないかとそこで田村麻呂ファンに怒られないように、一般に言われている出自と功績とを辿ってみると、概ね次のようになる。

先ず戸籍から見ると、どの武将もそうであったように本当か嘘かは問わないことにして坂上家も「名門」とされる。それも、既成の名家からイチ

ヤモンを付けられないように中国大陸のエリート「漢王朝の末裔」を称している。日本の歴史の黎明期である「大化の改新」頃には帰化人として奈良近郊田村の里に住んでいたと言う。それが田村麻呂の四、五代前であり、中国仕込みの武術をもつて新生日本の朝廷に奉仕していた。

現代の中国には五十以上の民族が居ると言われるが、その中でも絶対的多数を占め、中心的存在なのが漢字文化を背景とする漢民族である。やたらに漢字検定などが行われる今の日本も漢民族に入るかも知れないが、国家としての「漢」は「三国志」で知られた劉邦(りゅうほう)が紀元前二〇二年に洛陽(西亳)を都とした「前漢」と、一旦は外戚の王莽(おうもう)に奪われた帝位を一族の劉秀(りゅうしゅう)が再興した「後漢(二五〇〜三〇〇)」に分かれる。坂上氏は、後漢の衰退期に第十二代皇帝として即位した靈帝(二六七〜二八九)の後裔を称し、応神天皇の二十年(二八九)に一族と中国大陸十七県の民を率いて帰化したとされる阿知使主(あちのおみ)の子孫だと言っていた。応神天皇は百濟(くだら)の王族で西暦四百年代に九州で生まれたらしいから年代的には合わない：応神天皇が坂上氏か、どちらかに年代又は出自の「嘘」があると思われるけれども確かめようがない。後漢が滅亡した後の中国大陸は、数百年後に「隋」「唐」が統一するまで群雄割拠の時代であったが「魏志倭人伝」などで日本との交流が知られているから誰が来ても良い：と言うよりも、縄文人以外は遅かれ早かれ大陸から来た連中であるから、坂上氏だけが「帰化人」とされる謂れは無いのである。推測するところ、坂上一族は早くから「危険な仕事の専門店」軍事力供給会社」を経営して

いて、上辺だけでチヨロチヨロしている偽貴族社会からは職業差別で一段格下に見られていたのではあるまいか：「続日本紀」にも「：坂上家は世々弓馬を事とし馳射（ししゃ）馬上からの射撃を善くす」：「家は世々武を尚び、鷹を調へ馬を相（み）る。子孫業を伝え相次いで絶えず」と記録されているという。馬上からの射撃はメソポタミア辺りに居た遊牧民族から伝わった武技である。

特殊な商売であるから、景気は良く無かったが思いがけないところから儲かる注文が舞い込んで来た。それが、天智天皇の協力者であった弟の大海女皇子と、天智天皇の長男であるが母親の身分が低い大友皇子（弘文天皇）とが皇位を巡って争った「壬申の乱」の軍事需要である。この出来事は日本史の原点に関わる重要なことなのであるが謎が多く一般に良くは理解されていない。本来は勝つてはいけない大海女皇子こと天武天皇が勝利してしまったために歴史が変えられた疑いが濃厚である。当然ながら「嘘とは言えない嘘」が日本史に採用されたと思われる。天智天皇の後継者として即位しながら敗者となった大友皇子こと弘文天皇は歴史から抹殺され、ほぼ千二百年も経って皇位に復することが出来た。坂上一族は、地元豪族の氏神様であった伊勢神宮が日本一の神様に昇格したように、勝利した天武天皇側に加わったことにより経営を立て直すことが出来たのである。

これで通常ならば坂上商會は大躍進をするところだが、歴史上の都合もあって、官僚に採用された程度の褒美で済まされた。しかし日本が天皇制国家として立ち上がる時代であるから、一時的な儲けよりも中央官庁に進出できたほうが利益は大きい。以後この一族は源氏、平家に先駆けて大和

朝廷の「危険任務」を担当することになるのだが中小企業であるから、大手筋の源平両氏のように手持ちの駒が無い。言わば「雇われママ」のような立場で戦場に行つたのである。

壬申の乱で活躍した（と、言うより商売に励んだ）のは田村麻呂の四代か五代前の人物であり名前も伝わっている。そして田村麻呂の祖父は武人として朝廷に仕え宮廷守護の責任者として聖武天皇から信任されたようである。先に述べたように、活躍を息子の手柄と間違えられた父親の坂上田麻呂は、次の孝謙天皇時代に「近衛府」の前身である「授刀衛（じゅとうゑ）」に勤務しており下級士官に任官していた記録があるらしい。

淳仁天皇の天平寶字八年（七六四）九月の始めに、先帝である孝謙天皇のもとに太政官の書記官から「首相の恵美押勝こと藤原仲麻呂に不穏な行動がある」というたれこみがあった。内容は「淳仁天皇から近畿地方の兵事使という任務を与えられた恵美押勝が、十か国から二十人ずつ五日間、合計で二百人の兵士を集めて訓練を行う筈なのに一か国当り六百人、合計で六千人に水増しをして命令を作成するように言われた；然も訓練の場所が恵美邸というのは不審である」とするもので、これは当時の公卿社会に流行していた「嘘」の告発では無く、言わば仲麻呂の腹心であるべき書記官の裏切りのような密告であった。

報告を受けた孝謙太上天皇の対応は、女性ながら機敏であった。公印を管理する役目の少納言を淳仁天皇の許に派遣して「天皇の御璽（印）と駅鈴」とを回収させた。淳仁天皇は数え切れないほど居た天武天皇の子孫の中から仲麻呂に庇護されていた（利用目的で）天皇であったから一味と看做されたのである。

「駅鈴」は石岡市でも鈴之宮神社に伝承が残る「駅家（うまや）」に置かれる駅馬（公用車）使用許可証兼専用道路通行許可証のようなもので天皇の手に置かれていた。これと実印とを抑えられると淳仁天皇は羽の抜けた孔雀と同じで誰にも注目されなくなる。

それでなくても或ることが孝謙太上天皇の逆鱗に触れて「天皇は小事のみを行え、国家の大事と賞罰は（太上天皇が）自ら行う」と宣告されていたのである。女帝を怒らせた原因——というのが弓削の道鏡の登用に関して藤原仲麻呂が「ゲスの勘ぐり」で意見がましいことを言った——それも自分で言うのが嫌なもので「淳仁天皇から言われた」ことである。

気の毒なようではあるが、天皇の権威を奪われた淳仁天皇は、その事態を雇い主のような仲麻呂に急報したから「御璽と駅鈴」を持った少納言守備隊の一行は敵に襲撃されることになった。襲つてきたのは仲麻呂の息子が率いる一隊である。これが普通の合戦なら互角に戦えるのだが、畏れ多い天皇の印と鈴を持った少納言殿を護つての戦いであるから不利になるところ、守備隊が踏ん張って敵の指揮官を射殺し、無事に任務を果たして孝謙太上天皇に「貴重品」を届けることが出来た。その際の隊長が坂上菟田麻呂なのである。

天皇の証拠「を奪えなかつた恵美押勝こと藤原仲麻呂は賊として退治された。淳仁天皇も淡路島に流され、脱走を試みたが失敗して死亡したことになる。脱走を試みたが失敗して死亡したことになるけれど「嘘」である。「殺された」とハッキリ記録すべきであろう。孝謙太上天皇は再び皇位に就いて称徳天皇となり弓削の道鏡を国政に参与させた。しかし、先に触れたように復位してから六年ほどで急死し、道鏡も失脚する…で、これは私が個人的につく「嘘」であるが、称徳天皇は殺害された—その

ように思う理由は、弓削の道鏡のこともあるが天皇が願掛けの為に「飲酒及び肉などの食用を禁止す！」と布告したからである。

酒も飲めず美味しいものも食えなくなることは、当時の公卿たちにとって生きる意味がなくなるほどの重大事であった。称徳天皇は禁酒令を出して一週間後に死亡し、その日のうちに酒飲みで知られた六十二歳の白壁王こと光仁天皇が、藤原百川らによって強引に即位させられた。何とも不思議な因縁である。皇位継承の有資格者は真面目に暮らしているとされる恐れがあったので、白壁王は飲めない酒を無理に飲んで逃げ廻っていたのであるが、称徳天皇の後継者決定など、手際が良すぎるから怪しむ要素は十分にあるのだが；畏れ多いことを考えて申し訳ない。

それはさて置き「藤原仲麻呂退治」に大きく貢献をした坂上苅田麻呂に話を戻すと、この功績を足掛かりにして大和朝廷のエリート軍人コースに乗り出世街道を歩んで陸奥鎮守府將軍にもなり、近衛師団の大將格で定年を迎えたと伝えられる。ところが、先に述べた「氷上川継の事件」に際して坂上苅田麻呂は謀反の企てに関与した疑いで刑罰を受け、程なく嫌疑が晴れて元の地位に復したと言っているのである。現代でも冤罪（えんざい）はやたらと有るから何とも言えないのであるが、「無実の罪」で消されることは「日常茶飯事」であった奈良時代に、純粹な謀反？に関与した疑いで有罪とされた者が、簡単に「シロ」に変わる；何かが有るのでは？と、これも疑ってみたい…。

(つづく)

【風の談話室】

明けましておめでと〜ございませう。

今年は、ふるさと風の会も7年目に入ります。振り返れば、遅々やってくるものだ、と思う反面、未だ7年目を迎えるところが、と到達点のなかなか見つからぬ焦りのようなものも覚えます。

しかし、7年目という年月は、矢張りそれなりの重みをもった成果をもたらしてくれていると、自画自賛するものもある。

一度の休みもなく続けてきたことで大切な友人や応援者の輪が作られてきた。当会報で言えば、この「風の談話室」なるコーナーの開設できたことは大きな前進であったと思つ。当会報に原稿を寄せてくださる方々がいなければ、このコーナーは成り立たないのだから大いなる前進と言えるだろうと思つています。

《ヨイシヨ広場》（陸平をヨイシヨする会）

謹賀新年

市川紀行

明けましておめでと〜ございませう。「ふるさと風」「ことば座」諸兄弟皆様のご健勝ご活躍をお祈り申し上げます。

この貴重な紙上に「ヨイシヨ広場」を設けて頂き喜びながら恐縮しています。いつも陸平や美浦の活動を鼓舞してくれる主宰白井氏の風のように広やかな心に感謝です。

さてこの数回の「風」で手話舞小林さんの「沖縄紀行」報告を楽しんで来ましたが、1月下旬ヨイシヨの会メンバーが大部分の「沖縄基地スタデ

イツアー」があります。20名ほどで会員の美浦教育長門脇氏（筑波大名譽教授も参加します。私は村長退任後すぐ地球一周の船旅「ピースボート」にのりました。豪華客船ではないNGOの船です。若者たちも含め多くの仲間が出来、下船後の夏、50人近くが私の呼びかけに応じて美浦に来てくれ陸平縄文の森コンサートの一夜を楽しんでくれました。そして13年後、会員の女性が私と同じ思いを抱いて「ピースボート」の旅に出ました。そこで沖縄の関係者や青年男女の平和への問題意識に触れ合うことが出来てこのツアーの企画実現となりました。美浦には「未来をつなぐ女性の会・結」がありこれが実行委員会を立ち上げました。ヨイシヨのメンバーと重なります。

昨年11月末このための沖縄学習会が案内を兼ねて持たれました。「ともかく知ろうよ」ということです。東京から講師専門家が来しました。その前座で私が「沖縄の歴史と文化」の臨時講師を務めたのですが、その企画した女性が以下の私のことを知っていたからです。

沖縄の本土返還は72年ですからその前、60年安保の後です。私は学生演劇にかかわると同時に札幌の市民劇団「I F (イフ)の会」に参加していました。その頃雑誌「文学界」に木下順二の演劇台本「沖縄」が載りました。これをやることになり内緒で三幕目にあたる場面を私が書き足し、「島にて」と変え演出も担当しました。いろいろ経過もあるのですが公演は成功しマスコミ文化欄は「気骨ある公演」と書いてくれました。その裏付けの為に沖縄について歴史や文化、状況を調べたのです。沖縄はまだいわば「日本」ではなく北大にも多くの沖縄留學生がきていました。彼らから

も話を聞き劇中の歌も習いました。ベトナム戦争も激しく続いていました。そんなことで私に前座の役割が回ったのです。

当時の台本がありますが、台詞に浮かぶ状況も勝手な押し付けも、「本土」の加害と偏見も沖縄の「被害」も現在と変わっていないことを実感します。72年の「返還」後の年月。米軍基地の70%以上が沖縄にある現実。もう押し付けは無理なのです。「本土」はどこも受け入れません。それならと国中そろって基地削減や国外移転を迫る気迫も示せません。そのような認識を強める有力政治家はメディアにまかれた人々に追い落とされます。原発と同じく右も左も過激も偏向もありません。沖縄の子どもの澄んだまなざしで見たら本質がすっとわかる気がします。今度の女性たちが立ち上げた小さな旅はそのための小さな小さな一歩なのでしょう。私も琉球舞いと大好きな泡盛を楽しんできたいと思います。

正月早々また「風」紙上にも場違いの硬さになってしまったでしょうか。大震災原発事故で演劇公演などを延期中止してきたところ、50年近く前の公演などを思っついで懐かしくなりノスタルジアが高じたせいかも知れません。お許しください。美浦の舞踏家柏木さんがこの「ヨイショ広場」で白井啓治主宰者をヒロ爺などと尊敬と親しさをこめて呼んでいる。実に楽しい。笑って答える「ヒロ爺」ももつと楽しい。私の最初の孫が言葉がわかるようになったころ周りは私のことを「じいじい」と教えた。孫はよく発音できず「じいじい」といった。私はこれだと思った。「JJ」である。フランス語の感覚。ルソーも「J」だ、アルチュール・ランボオも「J」、プレヴェールもジロドゥも。

20年来のパリ郊外に住む友人もジャンだ。老「爺や」にはならないぞ。それ以来4人の孫は私をJJと自然に呼んでいる。妻も今ではJJである。それなら「ヒロJ」はいかがと思うのだがモダンバレリーナはウイとはいわない。「ヒロ爺」と「ユッキ」(小林さん)は彼女の中ではツインになっているから。今年も三人の独創的朗読舞を楽しみに待っている。8月の香港海外公演にはJJがヒロ爺のかばん持ちで随行出来ることを初夢とした。正月あけJJと孫たちは阿蘇と櫻島に研修旅行だ。今年南への旅が多くなりそうである。

市川さんとは、市川さんの主催する美浦村の市民劇団「宙の会」の公演に行つて以来のお付き合いを頂いている。昨年は、当云の兄妹である「朗読舞劇団ことば座」が、陸平遺跡で行われている縄文の森コンサートに招かれ、公演が実現した。そして、この公演が切つ掛けとなつて、モダン・ダンスの柏木久美子さんと小林幸枝さんの共演が実現できたのであった。そしてこの共演は、今年更に新しい展開をみせることとなった。

《ことば座だより》

進化する朗読舞劇

白井啓治

朗読で舞を舞つてみたら面白い表現が出来るのではないだろうか。そんなことを考えたのは随分昔のことである。その頃は超過密スケジュールで映像の仕事を行っていたので、面白い発想だとは思つても、そんな舞台表現が実現できるとは考えもいかなかった。

石岡へは、東京を引き上げ、田舎暮らしの予行演習のようなつもりで、三年ぐらいの腰掛でやって来たのであったが、たまたまの切つ掛けで打田昇三兄と出会うことになり、それが妙なと言いか予期せぬと言うべきか、の悪縁因縁を転がしてこの「ふるさと風」が誕生することになったのであった。そして、ふるさと風の前身が誕生するところに、聾者の小林幸枝と出会うこととなった。彼女と初めて会ったとき、彼女のスケール感のある手話が舞になることを発見し、朗読で舞を舞うという発想が、「手話を基軸とした朗読舞」という形の新しい舞台表現が誕生することとなったのであった。

特に小林幸枝と出会い、見よう見まねで手話を覚えていく中で知ったのは、手話は日本語ではなく手話語と言う英語やフランス語と同様な異文化圏の言語である、ということであった。日本人であるから、当然日本語の単語が基になっているのであるが、その言語表現はまったく日本語から離れて独立した日本語手話という言語であった。それが小林幸枝のスケール感にかかった時に言語そのものが舞になっていたのであった。

だから小林の舞う舞は、一般に知られている手話ダンスだとかまた踊り交じりの手話カラオケなどとは全く次元の違う、現代舞踏になっているのであった。

手話を基軸とした朗読舞の市民権を得るために劇団ことば座を立ち上げたのであったが、5年目にしてモダン・ダンスの柏木久美子さんと出会い、共演のチャンスが出来、朗読舞も新たな進化を遂げることとなった。

演出家としては、限定した一つの型や形式を作

り出してそこに定住してしまうことを嫌うのであるが、柏木久美子さんとの出会いによって、そのことを回避することが出来た。今年は、小林幸枝にとっても朗読舞にとっても大きな変化を迎える年になりそうである。

大きな変化と言えば、昨年6月に柏木さんとの共演を行ったときに、ミチオ同門会と合同で香港での公演の話が持ち上がったのであるが、それがいよいよ現実のものとなってきた。

柏木さんは、以前から伊藤道郎のためにホルストが作曲した「日本組曲」を、演じたいと話しており、その一部分でもよいから、オカリナの野口善広さんの演奏で舞ってみたいと話しておられた。それで、暮れにその曲を私にも送っていただいた。

「日本組曲」は演奏時間十二分の組曲であるが、外国人が良く陥るオリエンタル調の全くない、日本人の作曲家が作ったのかと思える見事な作曲になっていた。この曲の完成は、生前伊藤道郎自身知ることもなく、舞踏として舞台上に乗せられたこともないものである。当然のことながら柏木さんとしては、自分が演じてみたい曲であらうと思う。

年末からこの日本組曲を聞きながら、どのような物語が組み上げられるか、考えていたのであったが、以前小林が野口さんのオカリナで舞ったことがある「天職」という詩を当てて朗読してみたのであるが、なかなか面白い感じになった。それに気を良くして、この日本組曲に、柏木久美子さんと小林幸枝が全く違う感性で、一つの詩を表現するという舞台を作り上げてみたいものと、今頭を捻っているところである。

小林幸枝の手話を基軸とした舞も、手話を超えて言葉の風としての流れに変容していつてくれる

ことを期待し、今後の伸びを楽しみにしている。演出家と言うのは、かなりな欲深者でどこまで行ってもこれで良いかと思うことはない。もっと新しく違うことがあるのではないか、もっと、もっとと終りを考えることがない。

先日、新藤兼人先生が百歳でメガホンをとりたいと話されていたが、新藤兼人聖人にしてもまだ欲深さを忘れないで「次には自分の真の代表作を」と考えておられる。小生も歳に相応しい好々爺になろうなんてことは露ほどにも考えず、命尽きるまで新しい変化を求め続けることが重要であろうと思っている。実際、そんなことを思っていると、柏木久美子さんと野口善広さん、また昨年暮れにコラボレーションしてくれたギタリストの大島直さん等、新しい変化と創造を生み出してくれることになる。

今年のことば座も、積極的な変化と進化を志向してやっつけていこうと思っている。

最近、口を開けば「自力たれ」を言っているのであるが、年が明けてみると天張り大声で「自力たれ」を叫ばねばと思っている。

昨年3月11日の大震災以降ますます「自力たれ」「こそが己を救い明日を切り開いてくれる」と確信を強めている。

我が風の会のメンバーも、「自力たれ」を忘れてしまったのでは、どんなに素晴らしいことを言葉だけに言ってみても、その言葉には真実味はなく、ただただ空しく空回りする函車になってしまつた。

歴史の里も、ふる里も、町おこしもどこかの成功例を参考になんて「自力力」を何処かに置いて来ての思きでは興るものも興らないし、元気が

みなぎるわけもない。

「自力力」「文化力」への確かなる認識が生まれなければ、何事に対してもその第一歩が生まれる筈はない。(つづ)

月に何度かギター文化館へ行くのであるが、喫茶室や駐車場から眺める向かいの里山は何時も色々なことを呟いてくれる。年始に出かけた時に里山を眺めていたら、こんな文が浮かんだ。

鋭い棘をもった木枯しが
里山の景色を

雑木林を削っていく。

雑木林の木々の枝は
木枯しを切り裂く
強かな細い鞭となって鋭い声を上げる。

里山は
みるみる無駄を殺ぎ落として
春を迎えるための身支度を
すつかりと整えていた。

(雨露)

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

ふるさと風の文庫

新刊

- ◎ふるさとの歴史物語に新しい扉を開いた打田昇三の作品が全集となります。
今回は第1～6巻が発売されます。(各巻1200円)
(歴史の里石岡とは言われながら、多くの歴史文化がわすれられていく中に
伝え残していかなければならない歴史文化を独自の視点で見つめなおした作品集)
- ◎兼平ちえこのふるさと散歩「歴史の里いしおかめぐり」(1200円)
(ふるさと石岡の絵散歩文庫。東日本大震災の被害に合う前の、貴重な石岡史跡の
絵が満載です)

※ギター文化館にて発売しております。

明けましておめでとうございます。

2012年ことば座定期公演(ギター文化館発常世の国の恋物語百)は、
6月15・16・17日/12月1・2日を予定しております。
6月公演では、昨年に続きモダンダンスの柏木久美子さんとの共演で
「日高見の舞」(仮題)を予定しています。どうぞご期待ください。

朗読劇・朗読舞劇研究生募集!!

あなたの隠れた才能をことば座に発見してみませんか

ことば座では、朗読舞及び朗読舞劇に朗読する、朗読俳優および朗読舞俳優志望者を募集しております。
研修期間は12ヶ月。演劇としての朗読の基礎と演技手話を学んで頂き、研修後は、ことば座劇団員として
活動して頂きます。

- ◎募集要項
募集：朗読劇&朗読舞劇俳優養成コース
募集人員：5名程度 ※面接及び朗読と簡単な表現試験有り
養成期間：1年間(入塾は随時受付しています)
指導月4～6回
受講料：月額20,000円(全・半納割引有り)
※詳しくは、ことば座事務局 0299-24-2063(担当:白井)までお問い合わせください。